

「いっぱい食べて元気になる！！」

～「経口摂取の取り組み」から得た副産物～

施設名：老人保健施設 やすらぎの里
発表者： 高良 露菜（介護福祉士）
伊集 智愛子（看護師）

【はじめに】

人間の生活にとって食に対する欲求は、
欠く事のできない重要な要素である。
嚥下摂食機能の問題により欲求を十分に
満たしてない事もあり、今回私たちは摂
食障害により胃婁造設・経管栄養注入を
行っているが「食べたい。」という本人の思
い、又チューブが挿入されている事に対
し強い違和感のある利用者に対し、何度
もカンファレンスを持ち本人の思いにこ
たえ3食経口摂取、胃婁チューブ抜去し
穏やかな入所生活を獲得した事例を報告
する。

【事例紹介】

K M様 女性 80代
認知度 - b 長谷川式 12点
自立度 B - 2
介護度 3
大腸がんオペ後

*入所に至る経緯

有料老人ホーム入居中下血し、大腸がん
の診断にてA病院へ入院となるが、手術
の為B病院へ転院。術後の経過は良好で
あった術前から見られた認知症に起因す
る摂食障害のため、差し入れを間食して
いたが時にむせ込みがありムラがある状
況であった。B病院でのリハビリを経て、
現状での在宅介護は困難との事から当施

設入所の運びとなる。

【経過】

H20年5月当施設入所

入所当初より家族より差し入れがあり、
又施設でのオヤツ提供もしていたが摂取
にはムラがあった。

又、問題行動として車イスからの立ち上
がり、日中の不穏状態を繰り返し、暴言
や職員に対し暴力行為もみられた。

「(胃婁チューブをさわり)体に穴開けら
れた私のこと殺すつもりか～」等の発言
も聞かれた。入所当初本人家族より経口
摂取したいと希望があり、6月6日ケア
カンファレンスにて評価し7日より昼食
のみ開始となる。昼食摂取中は穏やかで
あったが朝夕の経管栄養のチューブをつ
なく事に抵抗多く不穏になる事があった。
本人より「もっとみんなと同じ物食べたい」という発言が聞かれるようになった。

14日より朝食開始、24日より3食開
始。穏やかに過ごす時間は多くなったが
突然胃婁チューブを、引っ張り「抜け～
人殺し！」と急に怒り出す事がありまた
頻回に触り引っ張るため浸出液が多くな
り悪臭がでてきた。その悪臭に怒り出す
という悪循環を招いていた。9月カンフ
ァレンスにて、家族へ現状報告し検討し

た結果 10 月 18 日ボタン式チューブへ変更する。しかし、違和感のためか直ぐに自己抜去再度チューブ挿入した。本人家族と話し合いチューブ挿入が強い違和感になっているという本人のニーズを最優先しチューブ抜去する。抜去後から、不穏、暴言など大幅に減り現在では他利用者を気かけ声掛けする等回りに関心を持つようになり、穏やかに過ごされている。

【まとめ】

本人や家族の希望に対し胃婁だからと決めつけ経口摂取は無理と思わず、段階を踏んだカンファレンスを繰り返し、3食の経口摂取が獲得された。又体内にチューブの入っている違和感や、食に対する自然な欲求を満たされない事で精神機能低下を招いている事に気づき、家族へチューブを抜去することによるメリット・デメリットを説明しチューブの抜去に至った。その結果、本人の精神機能面も併せて改善をみせ「QOLの向上」を実践する事ができた。

【おわりに】

「経管」による栄養供給だけではなく、膀胱瘻や膀胱へのフォーレも含めて『人間が体の中に異物を取り入れる行為（広く言えば、自分の意とはしないタイミングで口腔に入ってくる食事介助のスプーンも含めて。）は、その行為を受け入れる事でその人間は精神機能状態を3歳以下に引き下げる事になる。』と竹内も言っているように、経口にての食事や自立した排泄の獲得は精神機能面の維持にとってかけがえのない生活要素である。

「前は体に穴を開けてご飯を食べていた

けど今は口からいっぱい食べて元気になったさ」と笑顔ではなされ本人家族の意向に添った支援が良い結果をもたらす事を再確認し実感することが出来た。今後も利用者の声に耳を傾け支援方法を模索していきながら他職種でアプローチしていきながらより良いケアを追及していきたい。

【引用文献】

1 「ADLの同心円構造」竹内 孝仁